

と、細かい仕事が多い石油プラントなどでは使いのものになりませんから、だったら、まあ、日当が安くても原発の方にでも行こうかなあということになります。皆さんは何か勘違いして、原発というのはとても技術的に高度なものだと思いついて、そんな高級なものではないのです。ですから、素人が造る原発ということで、原発はこれから先、本当にどうしようもなくなってきます。

4. 名ばかりの検査・検査官

原発を造る職人がいなくなっても検査をきちりやればよいという人がいます。しかし、その検査体制が問題なのです。出来上がったものを見るのが日本の検査ですから、それではダメなのです。検査は施工の過程を見ることが重要なのです。検査官が溶接なら溶接を、「そうではない。よく見ていなさい。このようにするんだ」と自分でやって見せる技量がないと本当の検査にはなりません。そういう技量の無い検査官にまともな検査が出来るわけがないのです。メーカーや施工の説明を聞き、書類さえ整ってれば合格とする、これが今の官庁検査の実態です。原発の事故が余りにも頻繁に起き出した頃に、運転管理専門官を各原発に置くことが閣議で決まりました。原発の新設や定検(定期検査)の後の運転の許可を出す役人です。私もその役人が素人だとは知っていましたが、ここまでひどいとは知らなかったです。というのは、水戸で講演をしていた時、会場から「実は恥ずかしいんですが、まるっきり素人です」と、科技厅(科学技術庁)の者だとはっきり名乗って発言した人がいました。その人は「自分たちの職場の職員は、被曝するから絶対に現場に出さなかった。折から行政改革で農水省の役人が余っているというので、昨日まで養蚕の指導をしていた人やハマチ養殖の指導をしていた人を、次の日には専門検査官として赴任させた。そういう何も知らない人が原発の専門検査官として運転許可を出した。美浜原発にいた専門官は三か月前までは、お米の検査をしていた人だった」と、その人たちの実名を挙げて話してくれました。このように全くの素人が出す原発の運転許可を信用できますか。東京電力の福島原発で、緊急炉心冷却装置(ECCS)が作動した大事故が起きた時、読売新聞が「現地専門官カヤの外」と報道していましたが、その人は自分の担当している原発で大事故が起きたことを次の日の新聞で知ったのです。なぜ専門官が何も知らなかったのか。それは電力会社の人は専門官がまったくの素人であることを知っていますから、工事場のような騒ぎの中で子どもに教えるように、いちいち説明する時間なかったから、その人を現場にも入れないで放って置いたのです。だから何も知らなかったのです。そんないい加減な人の下に原子力検査協会の人があります。この人がどんな人かという、この協会は通産省を定年退職した人の天下り先ですから、全然畑違いの人です。

この人が原発の工事のあらゆる検査の権限を持っていて、この人のOKが出ないと仕事が進まないのですが、検査のことはなにも知りません。ですから検査と言ってもただ見に行くだけです。けれども大変な権限を持っています。この協会の下に電力会社があり、その下に原子炉メーカーの日立・東芝・三菱の三社があります。私は日立にいましたが、このメーカーの下に工事会社があるんです。つまり、メーカーから上も素人、その下の工事会社も殆ど素人ということになります。だから原発の事故のことも電力会社ではなくメーカーでないと、詳しいことは分からないのです。私は現役の間も辞めてからも、ずっと言っていますが、天下りや特殊法人ではなく、本当の第三者的な機関、通産省は原発を推進しているところから、そういう所と全く関係のない機関を作って、その機関が検査をする。そして検査官は配管のことなど経験を積んだ人、現場のたき上げの職人が検査と指導を行えば、溶接の不具合や手抜き工事も見抜けるからと、一生懸命に言ってきましたが、未だに何も変わっていません。このように日本の原発行政は余りにも無責任でお粗末なものなんです。

5. いいかげんな原発の耐震設計

阪神大震災後に慌ただしく日本中の原発の耐震設計を見直して、その結果を九月に発表しましたが、「どの原発も、どんな地震が起きても大丈夫」という呆れたものでした。私が関わった限り、始めのころの原発では地震のことなど真面目に考えていなかったのです。それを新しいのも古いのも一緒たにして大丈夫だなんて、とんでもないことです。1993年に女川原発の一号機が震度4くらいの地震で出力が急上昇して自動停止したことがありましたが、この事故は大変な事故でした。なぜ大変だったかという、この原発では1984年に震度5で止まるような工事をしているのですが、それが震度5ではないのに止まったのです。わかりやすく言うと、高速道路を運転中ブレーキを踏まないのに突然、急ブレーキがかかって止まったと同じことなんです。これは東北電力が言うように、止まったからよかった、というような簡単なことではありません。5で止まるように設計されているものが4で止まったということは、5では止まらない可能性もあるということなんです。つまり、いろんなことが設計通りにいかないということの現れなんです。こういう地震で異常な止まり方をした原発は1987年に福島原発でも起きていますが、同じ型の原発が全国で10もあります。これは地震と原発のことを考えるとき、非常に恐ろしいことではないでしょうか。

6. 定期点検工事素人が

原発は1年くらい運転すると必ず止めて検査をすることになっていて、定期検査、定検といっています。原子炉には70気圧とか、150気圧とかいうものすごい圧力がかけられていて、配管の中には水、といっても300℃もある熱湯ですが、水や水蒸気がすごい勢

いで通り、配管の厚さが半分くらいに薄くなってしまふ所もあるのです。そういう配管とかバルブとかを定検でどうしても取り替えなくてはならないのですが、この作業に必ず被曝が伴う訳です。原発は一回動かすと、中は放射能、放射線で一杯になりますから、その中で人間が放射線を浴びながら働いているのです。そういう現場へ行くには、自分の服を全部脱いで防護服に着替えて入ります。防護服というと、放射能から体を守る服のように聞こえますが、そうではないんですよ。放射線の量を計るアラームメーターは防護服の中のチョッキに付けているのですから。つまり防護服は放射能を外に持ち出さないための単なる作業着です。作業している人を放射能から守るものではないのです。だから作業が終わって外に出る時には、パンツ一枚になって被曝していないかどうか検査をします。体の表面に放射能がついている、いわゆる外部被曝ですと、シャワーで洗うと大体流せますから、放射能がゼロになるまで徹底的に洗ってからやっと出られます。また、安全靴といって備付けの靴に履き替えますが、この靴もサイズが自分の足にきちっと合うものはありませんから、大事な働く足元がちゃんと定まりません。それに放射線を吸わないように全面マスクを付けたりします。そういう格好で現場に入り、放射能の心配をしながら働く訳ですから、実際、原発の中ではいい仕事は絶対に出来ません。普通の職場とはまったく違うのです。そういう仕事をする人が95%以上まるっきりの素人です。お百姓や漁師の人が自分の仕事が暇な冬場などにやります。言葉は悪いのですが、いわゆる出稼ぎの人です。そういう経験のない人が、怖さを全く知らないで作業をする訳です。例えばボルトをネジで締める作業をするとき、「対角線に締めなさい、締めないと漏れるよ」と教えますが、作業する現場は放射線管理区域ですから、放射能が一杯あって最悪な所です。作業現場に入る時はアラームメーターをつけて入りますが、現場は場所によって放射線の量が違いますから、作業の出来る時間が違います。分刻みです。現場に入る前にその日の作業と時間、時間というのはその日に浴びてよい放射線の量で時間が決まるわけですが、その現場が20分間作業ができる所だとすると、20分経つとアラームメーターが鳴るようにしてある。だから「アラームメーターが鳴ったら現場から出なさいよ」と指示します。でも現場には時計がありません。時計を持って入ると時計が放射能で汚染されますから腹時計です。そうやって現場に行きます。そこではボルトをネジで締めながら、もう10分は過ぎたかな、15分は過ぎたかなと、頭はそっちの方にばかり行きます。アラームメーターが鳴るのが怖いのですから。アラームメーターというのはピーツととんでもない音がしますので、初めての方はその音が鳴ると、顔から血の気が引く位怖いものです。これは経験した者でないと分かりません。

ピーツと鳴ると、レントゲンなら何十枚もいっぺんに写したくらいの放射線の量に当たります。ですからネジを対角線に締めなさいと言っても、言われた通りには出来なくて、ただ締めればよいと、どうしてもいい加減になってしまうのです。するとどうなりますか。

7. 放射能垂れ流しの海

冬に定検工事をする事が多いのですが、定検が終わると海に放射能を含んだ水が何十トンも流れてしまうのです。はっきり言って今、日本列島で取れる魚で、安心して食べられる魚はほとんどありません。日本の海が放射能で汚染されてしまっているのです。海に放射能で汚れた水をたれ流すのは定検の時だけではありません。原発はすごい熱を出すので、日本では海水で冷やしてその水を海に捨てていますが、これが放射能を含んだ温排水で一分間に何十トンにもなります。原発の事故があっても県などがあわてて安全宣言を出しますし、電力会社はそれ以上に隠そうとします。それに国民もほとんど無関心ですから、日本の海は汚ればなしです。防護服には放射性物質がいっぱいついていますから、それを最初は水洗いして、全部海に流しています。排水口で放射線の量を計ると、すごい量です。こういう所で魚の養殖をしています。安全な食べ物を求めている人たちは、こういうことも知って、原発にもっと関心をもって欲しいものです。このままでは放射能に汚染されていない物を選べなくなると思います。数年前の石川県の志賀原発の差止め裁判の報告会で、80歳近い行商をしているおばあさんがこんな話をしました。「私はいままでも原発のことを知らなかった。今日、昆布とわかめをお得意さんに持っていったら、その若奥さんに「悪いけどもう買えないよ、今日で終わりね、志賀原発が運転に入ったから」と言われた。原発のことは何も分からないけど、初めて実感として原発のことが分かった。どうしたらいいのかが」って途方に暮れていました。皆さんの知らない所で、日本の海が放射能で汚染され続けています。

8. 内部被曝が一番怖い

原発の建屋の中は全部の物が放射性物質に変わってきます。物が全て放射性物質になり、放射線を出すようになるのです。どんなに厚い鉄でも放射線が突き抜けるからです。体の外から浴びる外部被曝も怖いですが、一番怖いのは内部被曝です。埃、どこにでもある塵とか埃。原発の中ではこの埃が放射能を浴びて放射性物質となって飛んでいます。この放射能をおびた埃が口や鼻から入ると、それが内部被曝になります。原発の作業では片付けや掃除が一番内部被曝をしますが、この体の中から放射線を浴びる内部被曝の方が外部被曝よりもずっと危険なのです。体の中から直接放射線を浴びるわけですから。体の中に入った放射能は通常は、三日位で汗や小便と一緒に出てしましますが、三日なら三日、放射線を体の中に置いたままになります。また、体から出るといっても、人間が勝

手に決めた基準ですから、決してゼロにはなりません。これが非常に怖いのです。どんなに微量でも、体の中に蓄積されていきますから。原発を見学した人なら分かると思いますが、一般の人が見学できる場所はとても綺麗にしてあり、職員も「きれいでしょ」と自慢そうに言いますが、それは当たり前なのです。綺麗にしておかないと放射能の埃が飛んで危険ですから。私はその内部被曝を百回以上もして、癌になってしまいました。癌の宣告を受けたとき、本当に死ぬのが怖くて怖くてどうしようかと考えました。でも私の母が何時も言っていたのですが、「死ぬより大きいことはないよ」と。じゃ死ぬ前になにかやろうと。原発のことで、私が知っていることをすべて明るみに出そうと思ったのです。

9. 普通の職場環境とは全く違う

放射能というのは蓄積します。いくら微量でも十年なら十年分が蓄積します。これが怖いのです。日本の放射線管理というのは年間50ミリシーベルトを守ればよい、それを越えなければいいという姿勢です。例えば定検工事ですと三ヶ月位かかりますから、それで割ると一日分が出ます。でも放射線量が高い所ですと、一日に五分から七分間しか作業が出来ない所もあります。しかしそれでは全く仕事になりませんから、三日分とか、一週間分を一遍に浴びせながら作業をさせるのです。これは絶対にやってはいけない方法ですが、そうして10分間なり20分間なりの作業ができるのです。そんなことをすると白血病とかガンになると知っているとまだ良いのですが、電力会社はこういうことを一切教えません。稼働中の原発で、機械に付いている大きなネジが一本緩んだことがありました。動いている原発は放射線の量が物凄いですから、その一本のネジを締めるのに働く人30人を用意しました。一列に並んでヨーイドンで七メートル先にあるネジまで走って行きます。行って一、二、三と数えるくらいで、もうアラームメーターがピーツと鳴る。中には走って行ってネジを締めるスパナはどこにあるんだ?と言ったら、もう終わりの人もいる。ネジをたった一山、二山、三山締めるだけで百六十人分、金額で四百万円位かかりました。なぜ原発を止めて修理しないのかと疑問に思われるかもしれませんが、原発を一日止める何億円もの損になりますから、電力会社は出来るだけ止めないのです。放射能というのは非常に危険なものです。企業というものは人の命よりもお金ののです。

10. 「絶対安全」だと五時間の洗脳教育

原発など、放射能のある職場で働く人を放射線従事者といいますが、日本の放射線従事者は今までに約27万人ですが、その殆どが原発作業員です。今も9万人位の方が原発で働いています。その人たちが年一回行われる原発の定検工事などを、毎日被曝しながら支えているのです。原発で初めて働く作業員に対し、放射線管理教育を約五時間かけて行います。この教育の最大の目的は、不安

の解消の為です。原発が危険だとは一切教えません。国の被曝線量で管理しているの、絶対大丈夫なので安心して働きなさい、世間で原発反対の人たちが放射能でガンや白血病に冒されると言っているが、あれはマッカナ、オオウソである。国が決めたことを守っていれば絶対に大丈夫だと五時間かけて洗脳します。こういう「原発安全」の洗脳を、電力会社は地域の人も行ってきます。有名人を呼んで講演会を開いたり、文化サークルで料理教室をしたり、カラー印刷の立派なチラシを新聞折り込みしたりして。だから事故があって、ちょっと不安に思ったとしても、そういう安全宣伝にすぐに洗脳されてしまって、「原発がなくなったら、電気がなくなって困る」と思い込むようになるのです。私自身が20年近く現場の責任者として、働く人にオウムの麻原以上のマインドコントロール「洗脳教育」をやって来ました。何人殺したかわかりません。みなさんから現場で働く人は不安に思っていないのかとよく聞かれますが、放射能の危険や被曝のことは一切知らされていませんから、不安だとは大半の人は思いません。体の具合が悪くなくても、それが原発のせいだとは全然考えもしないのです。作業員全員が毎日被曝をする。それをいかに本人や外部に知られないように処理するかが責任者の仕事です。本人や外部に被曝の問題が漏れるようでは、現場責任者は失格なのです。これが原発の現場です。私はこのような仕事を長くやっていて、毎日がいたたまれない日も多く、夜は酒の力を借り、酒量が日毎に増していきました。そうした自分自身に問いかけることも多くなっていました。一体何の為に誰の為に、このような嘘の毎日を過ごさねばならないのかと。気がついたら20年の原発労働で、私の体も被曝でぼろぼろになっていました。

11. だれが助けるのか

また東京電力の福島原発で現場作業員がグラインダーで額を切って、大怪我をしたことがありました。血が吹き出ていて一刻を争う大怪我でしたから、直ぐに救急車を呼んで運び出しました。ところがその怪我人は放射能まみれだったのです。でも電力会社も慌てていたので防護服を脱がせたり体を洗ったりする除洗をしなかった。救急隊員にも放射能汚染の知識が全くなかったの、その怪我人は放射能の除洗をしないままに病院に運ばれてしまったんです。だからその怪我人を触った救急隊員が汚染される、救急車も汚染される、医者も看護婦さんも、その看護婦さんが触った他の患者さんも汚染される、その患者さんが外へ出て、また汚染が広がるという風に、町中がパニックになる程の大変な事態になってしまいました。みんなが大怪我をして出血のひどい人を何とか助けたいと思って必死にただけで放射能は全く見えませんから、その人が放射能で汚染されていることなんか、誰も気が付かなかったんですよ。一人でもこんなに大変なんです。それが

仮に大事故が起きて大勢の住民が放射能で汚染された時、一体どうなるのでしょうか。

12. びっくりした美浜原発細管破断事故!

皆さんが知らないのか、無関心なのか、日本の原発はびっくりするような大事故を度々起こしています。スリーマイル島とかチェルノブイリに匹敵する大事故です。1989年に東京電力の福島第二原発で再循環ポンプがバラバラになった大事故も、世界で初めての事故でした。そして1991年2月に関西電力の美浜原発で細管が破断した事故は、放射能を直接に大気中や海へ大量に放出した大事故でした。チェルノブイリの事故の時には、私はあまり驚かなかったんですよ。原発を造って、そういう事故が必ず起こると分かっていたから。だからああ、たまたまチェルノブイリで起きたと、たまたま日本ではなかったと思ったんです。しかし美浜の事故の時もうびっくりして、足がガクガクふるえて椅子から立ち上がれない程でした。この事故はECCS(緊急炉心冷却装置)を手動で動かして原発を止めたという意味で、重大な事故だったんです。ECCSというのは、原発の安全を守るための最後の砦に当たります。これが効かなくなったらお終いです。だからECCSを動かした美浜の事故というのは、一億数千万の人を乗せたバスが高速道路を100キロのスピードで走っているのにブレーキも効かない、サイドブレーキも効かない、崖にぶつけてやっとなめたという大事故だったんです。原子炉の中の放射能を含んだ水が海へ流れ出て、炉が空焚きになる寸前だったのです。日本が誇る多重防護の安全弁が次々と効かなくて、あと0.7秒でチェルノブイリになるところだった。それも土曜日だったのです。が、たまたまベテランの職員が来ていて、自動停止するはずが停止しなくて、とっさの判断で手動で止めて、世界を巻き込むような大事故に至らなかったのです。日本中の人が、いや世界中の人が本当に運がよかったのです。この事故は、2ミリくらいの細い配管についている触れ止め金具、何千本もある細管が振動で触れ合わないようになっている金具が設計通りに入っていないのが原因でした。施工ミスです。そのことが20年近い何回もの定検でも見つからなかったのですから定検のいい加減さがばれた事故でもあった。入らなければ切って捨てる、合わなければ引張るといふ、設計者がまさかと思うようなことが、現場では当たり前に行われているということが分かった事故でもあったんです。

13. もんじゅの大事故

去年(1995年)の12月8日に、福井県の敦賀にある動燃(動力炉・核燃料開発事業団)のもんじゅでナトリウム漏れの重大事故が起きました。もんじゅの事故はこれが初めてではなく、それまでも度々事故を起こしている、私は建設中に六回も呼ばれて行きました。というのは、所長とか監

督とか職人とか元部下だった人達がおもんじゅの担当もしているの、何か困ったことがあると私を呼ぶんです。もう会社を辞めていましたが、原発だけは事故が起きたら取り返しがつきませんから、放って置けないので行くのです。ある時電話がかかって、「配管がどうしても合わないから来てくれ」という。行って見ますと、特別に作った配管も既製品の配管もすべて図面通り、寸法通りになっている。でも合わない。どうして合わないのか、いろいろ考えましたが、なかなか分からなかった。一晩考えてようやく分かりました。もんじゅは、日立、東芝、三菱、富士電機などの寄せ集めのメーカーで造ったもので、其々の会社の設計基準が違っていたのです。図面を引くときに私が居た日立は0.5mm切捨て、東芝と三菱は0.5mm切上げ、日本原研は0.5mm切下げなんです。たった0.5mmですが、百箇所も集まると大変な違いになるのです。だから数字も線も合っているのに合わなかったのですね。これではダメだということで、みんな作り直させました。何しろ国の威信がかかっていますからお金は掛けるんです。どうしてそういうことになるかということ、それぞれのノウハウ、企業秘密ということがあって、全体で話し合いをして、この0.5mmについて切上げるか、切下げるか、どちらかに統一しようという様な話し合いをしていなかったのです。今回のもんじゅの事故の原因となった温度センサーにしても、メーカー同士で話し合いもされていなかったのではないのでしょうか。どんなプラントの配管にもあのような温度計がついていますが、私はあんなに長いのは見たことがありません。おそらく施工した時に危ないと分かっていた人がいたはずですね。でも、よその会社のことだからほっとけ、自分の会社の責任ではないと。動燃自体が電力会社からの出向で出来た寄せ集めですが、メーカーも寄せ集めなんです。これでは事故は起こるべくして起こる、事故が起きないほうが不思議で、起こって当たり前なんです。しかしこんな重大事故でも、国は「事故」と言いません。美浜原発の大事故の時と同じように「事象があった」と言っていました。私は事故の後、直ぐに福井県の議会から呼ばれて行きました。あそこには15基も原発がありますが、誘致したのは自民党の議員さんなんです。だから私はそういう人に何時も、「事故が起きたらあなたの方のせいだよ、反対していた人には責任はないよ」と言ってきました。この度、その議員さんたちに呼ばれたのです。「今回は腹を据えて動燃とケンカする、どうしたらよいか教えてほしい」と相談を受けたのです。それで、私がまず最初に言ったことは、「これは事故なんです、事故。事象という言葉に誤魔化されちゃあだめだよ」と言いました。県議会で動燃が「今回の事象は……」と説明を始めたら、「事故だろ!事故!」と議員が叫んでいたのが、テレビで写っていましたが、あれも黙っていたら、軽い「事象」ということ

にされていたんです。地元の人たちだけではなく、私たちも向こうの言う「事象」というような軽い言葉に誤魔化されてはいけないんです。普通の人にとって、「事故」というのと「事象」というのでは捉え方が全く違います。この国が事故を事象などと言い換えるような姑息なことをしているので、日本人には原発の事故の危機感が殆どないのです。

14. 日本のプルトニウムがフランスの核兵器に?

もんじゅに使われているプルトニウムは日本がフランスに再処理を依頼して抽出したものです。再処理というのは原発で燃やしてしまったウラン燃料の中に出来たプルトニウムを取り出すことですが、プルトニウムはそういう風に人工的にしか作れないものです。そのプルトニウムがもんじゅには約1.4トンも使われています。長崎の原爆は約八キロだったそうですが、一体もんじゅのプルトニウムでどのくらいの原爆ができますか。それに、どんなに微量でも肺ガンを起こす猛毒物質です。半減期が2万4千年もあるので、永久に放射能を出し続けます。だからその名前がプルトー、地獄の王という名前からつけられたように、プルトニウムはこの世で一番危険な物といわれるわけですよ。しかし日本のプルトニウムが去年(1995年)南太平洋でフランスが行った核実験に使われた可能性が大きいことを知っている人は余りいません。フランスの再処理工場ではプルトニウムを作るのに核兵器用も原発用も区別がないのです。だから日本のプルトニウムがこの時の核実験に使われてしまったことはほとんど間違いありません。日本がこの核実験に反対をきっちり言えなかったのは、そういう理由があるからです。もし日本政府が本気でフランスの核実験を止めさせたかったら簡単だったのです。つまり再処理の契約を止めればよかったんです。でもそれをしなかった。日本とフランスの貿易額で二番目に多いのは、この再処理のお金なんです。国民はそんなことも知らないで、いくら「核実験に反対、反対」といっても仕方ありません。それに唯一の被曝国と言いつつ、日本のプルトニウムがタチマチの人々を被曝させ、綺麗な海を放射能で汚してしまったに違いありません。世界中が諦めたのに日本だけはまたこんなもので電気を作ろうとしているんです。普通の原発で、ウランとプルトニウムを混ぜた燃料(MOX燃料)を燃やす、いわゆるプルサーマルをやろうとしています。しかしこれは非常に危険です。分かりやすく言うと石油ストーブでガソリンを燃やすようなことなんです。原発の元々の設計がプルトニウムを燃やすようになっていません。プルトニウムは核分裂の力がウランとはケタ違いに大きいんです。だから原爆の材料にしている訳ですから。いくら資源がない国だからといっても、あまりに酷すぎるんじゃないでしょうか。早く原発を止め、プルトニウムを使うなんてことも止めなければ、あちこちで被曝者が増えていくばかりです。

15. 日本には途中でやめる勇気がない

世界では原発の時代は終わります。原発の先進国のアメリカでは、二月(1996年)に2015年までに原発を半分にするという発表をしました。それにプルトニウムの研究も大統領命令で止めています。あんなに怖い物、研究さえ止めました。もんじゅのようにプルトニウムを使う原発、高速増殖炉も、アメリカはもちろんイギリスもドイツも止めました。ドイツは出来上がったのを止めてリゾートパークにしてしまいました。世界の国がプルトニウムで発電するのは不可能だと分かって止めたんです。日本政府も今度のもんじゅの事故で「失敗した」と思っているでしょう。でも、まだ止めない。これからもやると言っています。どうして日本が止めないかということ、日本には一旦決めた事を途中で止める勇気がないからで、この国が途中で止める勇気がないというのは非常に怖い事です。皆さんもそんな例は山程ご存じでしょう。とにかく日本の原子力政策はいい加減なのです。日本は原発を始める時から後のことは何にも考えていなかった。その内に何とかなるだろうと。そんないい加減なことでやってきたんです。そうやって何十年もたった。でも、廃棄物一つのことさえどうにもできないんです。もう一つ大変なことは、今までは大学に原子力工学科があってそれなりに学生がいましたが、今は若い人たちが原子力から離れてしまい、東大をはじめ殆どの大学からなくなってしまいました。机の上で研究する大学生さえなくなりました。また日立と東芝にある原子力部門の人も三分の一に減って、コージェネレーション(電気とお湯を同時に作る効率のよい発電設備)のガス・タービンの方へ行きました。メーカーでさえ、原子力はもう終わりにしているのです。原子力局長をやっていた島村武久さんという人が退官して、『原子力談義』という本で、「日本政府がやっていてのは、ただのつじつま合わせに過ぎない、電気が足りないのでも何でもありません。あまりに無計画にウランとかプルトニウムを持ちすぎたことが原因です。はっきりノーといわないから持たされてしまったのです。そして日本はそれらで核兵器を作るんじゃないかと世界の国々から見られる、その疑惑を否定するために核の平和利用、つまり、原発をもっともっと造ろうということになるのです」と書いていますが、これもこの国の姿なんです。

16. 廃炉も解体も出来ない原発

「安全」は机上の話 1966年に、日本で初めてイギリスから輸入した16万キロワットの営業用原子炉が茨城県の東海村で稼働しました。その後はアメリカから輸入した原発で、途中で自前で造るようになりましたが、今ではこの狭い日本に135万キロワットというような巨大な原発を含めて51の原発が運転されています。具体的な廃炉・解体や廃棄物のことなど考えないままに動かした原発ですが、厚い鉄ででき

